

第二師団諸隊は明号作戦終了後、逐次ビルマから反転して来たが、戦力の消耗が大きく直ちに使用することができなかつた。軍はまず第二師団の戦力充実を急務とし、航空地区部隊などの整理に伴う剰余兵力約二万名を総軍から受領して、うち六、〇〇〇名を第二師団に充當、その人員の充実を図つた。即ち、二個大隊の一連隊、三個大隊の一連隊を編制、警備に当たらせ、七月にはさらに補充員を加え、師団大改編を行つた。

## 南洋の孤島

### クサイエ島戦記

石川県 山城 重次郎

大正九年八月二十五日、石川県羽咋郡北莊村字宝達で生まれ、家業は林業、炭焼きです。兄三人の四人兄弟でしたが、両親は死にました。学校を卒業、金沢へ出て印刷屋に住み込み修業していました。昭和十五年徴兵検査では第二乙でしたが、印刷屋にいるとき、教

育召集を受け、歩兵第七連隊に入隊、三カ月で解除になりました。その時、教官は「お前たちが家に帰るより先に赤紙がきているかわからんぞ」と言われました。その頃は米栖大使が米国で交渉中でした。昭和十六年十一月金沢へ帰り、印刷屋に戻っていました。

開戦直前の召集解除ですから、再召集がいつくるかと思つている一年間に平和産業は配給も少なくなり、苦しくなりました。そのため、友人の紹介で川崎市今井南町（東横線の工業都市駅近く）の富士通信の下請けの軍需工場に勤めました。通信機の部品作りを丸一年しているうち、十八年八月末、召集の赤紙がきました。

昭和十八年九月三日、金沢の歩兵第七連隊の留守部隊に入隊、南方行きのため、その日のうちに再編制されました。出発は九月十日、金沢―宇品、一万トン級という「栗田丸（仮装巡洋艦）」に弾薬、兵器を積み込み、宇品港から南洋カロリン諸島ボナベ島へ向け出航しました。豊後水道では多くの人たちが船酔いしましたが私は大丈夫でした。食事は海軍の乾パンが支給

されましたが、陸軍のより美味でした。

歩兵第一〇七連隊は甲支隊となつたのです。甲支隊はマキン、タワラの敵前上陸が任務だったので、その時既に玉砕していて間に合わず、マーシャル諸島クウエジェリン環礁に上陸しました。島は三日月型で長さ四キロ、幅五百メートルの小環礁（飛行場もあつた）で主力は海軍でした。

一週間か十日間で第三大隊はミレ島、本部はポナペ島に、私の第一大隊の大隊砲隊には軽迫撃砲と機関砲と曲射砲があり、私の分隊は軽迫撃砲でした。訓練はポナペでしましたが、第二大隊はポナペに残り、連隊本部、第一大隊と山砲第七中隊はクサイエ島に上陸しました。上陸したときは、戦備が整っていませんでした。我々は仮に設営部隊に入り、兵舎は農場にあり上空から丸見えていたから空襲を受け、山砲兵の何人かが犠牲になりました。そのため山中へ兵舎を移動して陣地構築してしました。その後、昭和十九年一月三日、南洋第二支隊が上陸して、一〇七連隊は原田少将の指揮下に入りました。

クウエジェリンからクサイエへの移動は駆逐艦でしたので、甲板に寝ていたら海軍から「陸サン下へ降りろ」と言う。「暑いから寝られん」と言う。「敵の潜水艦が近づいている」と言うので艦底に入り、二日ほどでクサイエへ着きました。

我々は、南洋へ来たばかりでこのような戦況も十分知らず、のんびりして甲板に寝ていたのでしたが、外洋の戦況は刻々と悪化していったわけです。そのため本格的な陣地構築と戦闘訓練に入りました。そうしているうちに敵の艦砲射撃を受けるようになりました。

〔註〕

一月末には米機動部隊、クウエジェリンなどマーシャル諸島に来襲（空母機約六〇〇、大型機も来襲）艦砲射撃も実施。

二月一日、クウエジェリン守備隊上陸米軍を撃退。

二月二日、米第四海兵師団、ルオット、ナム両島に、第七歩兵団クウエジェリン島に上陸。

二月五日、米第四海兵師団・陸軍第七師団クウエジ

ェリン島占領。

クウエジェリンはクサイエ島へ移ってから一月後に玉砕しましたが、その後は毎日空襲を受けました。あのままクウエジェリンにいたら我々も玉砕してしました。

私の中隊は山の中から下りて、湾内のレロ島の陣地構築と守備、その後レロ島には第一小隊と大隊砲の第五小隊を残し、中隊主力はマタンテ山（標高五九三メートル）麓のハーマン山に移動しました。

クサイエ島中央のヒンコール山（六二九メートル）島の周囲は珊瑚礁ですが、中は山地。私は連隊本部へ一日交代で伝令に通って、命令受領をしていました。本部と中隊との途中はジャングルや湿地帯があるので湿地には木の枝を敷き、暗くなると渡れないので山砲陣地の道を通るのです。山砲の兵隊が新聞が見たくて待ち伏せしているので、それを見せてまた走って准尉のいる中隊事務室の小屋へ書類等を渡しました。准尉が目を通してから上流の本部将校宿舎まで行く。これが伝令の任務で一日交代の勤務です。一晩は本部に泊

り、翌日中隊へ帰る日課でした。

レロ島にいたとき、本部へ保革油をもらいに行き、帰る途中栈橋で空襲に遭いました。隠れる物もなく、トロツコの下に隠れましたら、爆弾が栈橋の脇の水中に落ち大きな火柱が立ちました。飛行機が飛び去ってから丸木舟に乗りましたら仮死した魚が浮いていて、その魚をもって中隊に帰り、ルーズベルト給与といって皆に渡したこともありました。

レロ島駐留時、山砲陣地へ伝令に行ったとき、ハーマン水道の手前で、椰子の木スレスレに飛行機の機銃掃射を受けました。一機通り過ぎたと思ったら二機目が襲って来る。海の中へ飛び込んだが私は泳げないので丸木舟の縁につかまって難を逃れましたが、敵の三機はレロ島を射撃しました。

本島の山砲陣地に帰り、塩水で濡れた服を水洗いし、レロ島へ暗くなって帰ったら中隊長は「お前生きていたか」と喜ばれましたが、自動砲分隊の兵隊が機銃で一人は片腕を切り、一人は右肩から右脇下、もう一人は目をかする負傷を負っていました。

その後、毎日又は一日おきに偵察と機銃掃射を受けた。防空壕はあったのですが、先程の片腕切ったのは（衛生兵が鋸で切った）壕の中で負傷でした。その頃の中隊の犠牲者はハーマン山で病死した者はいたのですが、機銃掃射の犠牲者はこの三人でした。

食糧は、米の飯は無く、連隊本部からは芋と芋蔓だけ、中隊では海水をドラム缶に入れ炊いて煮詰めて塩にします。飲料水は天水、ハーマン山では小川の水、幸いにマラリア蚊はいなかったのです。

兵隊はレロ島の住民から離れて生活するようにしていましたが、空襲もあるのでクサイエ島へ新レロ村を作り住民はそこへ住まわせました。日本の委任統治領でしたからほとんど日本語を話していました。伝令の途中病人にクレオソートをやったら、そのお礼に魚の石焼や食物をくれたこともありました。兵は住民に近づいてはならぬとされていたのですが、両者のトラブルはありませんでした。

ハーマン山と名付けたものハーマンという人は椰子油などを作っていたドイツの人（南洋は第一次大戦

までドイツ領）で、山の椰子をU字溝を使って流し、集めていて、第二支隊の近くにいました。准尉の所へ行くにはそのU字溝に沿って行くと道を間違えずにすみました。ハーマンさんや現地民は水車を動力として使っていたようです。

初めて艦砲射撃を受けたとき、日本の連合艦隊が来たかと思っていましたら、急に敵からの射撃で驚きました。夜になると照明弾を撃ち上げ、海岸線を撃っていました。

空襲の話に戻しますが、空襲されたとき、平井軍医中尉は兵隊を壕に入れ、自分は入口にいて戦死されました。私も棧橋の所にいればその防空壕に入っていたでしょう。中隊の重機関銃が敵機に応戦したら、上官から「撃つな」と叱られました。また艦砲射撃を受けたとき、速射砲を撃って連隊本部から「止めろ」と叱られました。火力も、兵器も全然違うのだから、こちらの位置が分かれば徹底的にやられてしまうからです。

兵器、弾薬はもちろん、被服も、食糧も、南海の孤島、しかも連合軍攻撃の中だから補給はない。動物性

蛋白質は、干潮のとき珊瑚礁で捕る魚だけです。夜大潮のとき、リーフに網を張り、干潮になったら網の中の魚を捕まえる。漁獲中空襲があつても動かなければ空から発見されず機銃掃射は受けませんでした。

中隊主力がハーマン山に移動しマタンテン山に陣地構築を始めたころから、編上靴はお米とともに戦闘時用として、普段は使用が禁止となりました。したがつて、カラオという木の皮を剥がして川の水に一週間余り浸してから上げて乾かし、麻のようになったもので草鞋わらじや草履を作り、それらを終戦まで使用していました。またカラオの麻は針金で作つた代用の針に通して縫い糸にしてみました。

食料や漁労をしない一般の兵はマタンテ山で陣地を作り、岩山をタガネで掘つて洞窟を作っていました。敵上陸の防御です。海岸線では水際防御、山の奥に縦深陣地を作る。マングローブは堅い木なので戦車防塞杭としました。山へマングローブの木を担いで登り、洞窟の入口の掩蓋にしました。作業隊はマングローブを切る専門の兵だったので。

食料は島に来てから丸二年は米の飯は食べられず、雑草や鼠やかげを食べていました。主食は芋ですが少ないので、隠れて椰子の実やバナナ、パンの実を取つて食べましたが、これは禁止されているので、見付かると重賞倉（連隊本部にあつた）へ入れられました。このため軍曹から兵隊に降格された人もいるのです。

終戦は伝令をしていたので、そうではないかと思ひ中隊長へ報告しました。翌日「略綬をつけ正装で集合」の連隊命令が来しました。それは十六日ころか、中隊長らが軍旗を焼きました。兵隊は参加せず中隊長のみであつたようです。

日本へ帰るまで、畑にしていた運動場を修復するため戦車壕を埋めたりしました。また日本へいつ帰れるか分からないので畑を作りました。補給は連合軍からもなかつた。島民にはあつたらしいですが芋と芋蔓一筋で十一月末まで生き延びました。連隊本部と患者は病院船「氷川丸」で出発、他はその後貨物船で、浦賀港に着いたのは十一月末ころでした。私の復員は昭和二十年十二月三日でした。

浦賀から、東海道線回りの貨車で、米原から北陸線で帰りました。家には内地を出てから全然連絡していませんでした。兄は一応兵隊に行ったが、帰ってまいりました。しかし、私の体は骨と皮だけで金火箸のようなものでした。

船は部隊一緒(第二支隊も)に乗り浦賀に上陸、満三年以上の者は皆伍長、私は三年未満なので兵長でした。また、郵便に書いて大隊長の印が捺してある善行証を復員の時にもらいました。

家に帰って体力が回復するまで、山兔をとったりしてひと冬家で遊ばせてもらい、その後金沢の印刷屋に通うようになりました。毎朝六時、一番列車に乗り八時始業、残業の時は終列車で帰ります。三カ月通いましたが、従兄に誘われ、東京台東区三輪橋の板金絞り屋へ勤めました。戦後のことで工場では洗面器や食器などを作ったのですが、そこでは三年間勤めて後、金沢の元印刷屋に帰り、昭和二十五年に結婚しました。

## 戦後五十年

### 忘れ得ぬ戦友の死

宮城県 佐々木 繁 男

私は大正十年宮城県で生まれましたので、昭和十六年徴集兵として検査を受けたのですが、現役兵でなく補充兵となりました。破竹の勢いで各地を占領した日本軍の進攻作戦が一応終了した時期の昭和十七年九月、召集令状が来しました。

入隊は予想していた仙台の連隊ではなく、新潟県の村松の部隊(東部〇〇部隊)でした。磐越西線の五泉駅で下車、当地で一泊、引率されて宮門を入りました。この村松の連隊跡には、宮門脇の衛兵立哨小屋がいまだに残っていますが、他は学校、住宅地となり、松林の中にわずかに面影を残すのみです。演習場の大日原は今自衛隊が使用し、数年前の大風水害の残骸という、山から流れ落ちた大石が、そこに草に覆われ